

論文の内容の要旨

論文題目 ジョルジュ・ソレルの思想とソレル主義の展開

氏名 金山準

本論文は、フランスの思想家ジョルジュ・ソレル（Georges Sorel 1847-1922）の社会思想について、後代への影響をも含めて検討することを目的とする。第一部では初期から主著『暴力論』（1908年）にいたる彼の思想形成を扱い、第二部では彼の思想の受容について、いくつかの重要な事例にかぎって考察する。具体的には、ドイツのロベルト・ミヘルス、イタリアのアントニオ・グラムシ、フランスのジョルジュ・ヴァロワである。

政治的な振幅の大きさや、関わった人的・知的文脈の多様さに起因するソレルの思想史上の位置づけ難さは、彼に関する研究のほぼすべてにおいて言及されている。彼の思想それ自体は根本的に非政治的な性質のものだったと思われるが、それにもかかわらずソレルの思想は、多様な政治的文脈に応じてさまざまなかたちで発展を遂げることになる。

序章にて彼のやや複雑な経歴とこれまでの研究史を検討したのち、本論第一部の第一章では、「新旧形而上学」（1894年）を中心とするソレルの初期の科学論をもとに彼の社会思想全般を貫くコスモロジー・存在論の骨格を描出する。「人工的自然」と「自然的自然」という対比は彼にとって根本的な構図であったと思われる。「人工的自然」とは端的には自然のエネルギーを利用する技術・「機械」の領域であり、人間の営為は基本的にこの圏内に限定される。ここに明らかに見られるとおり、彼にとって科学の基本モデルは機械工学であった。

第二章では、クローチェ・ラブリオーラらイタリアの哲学者とソレルの間でかわされたマルクス主義をめぐる論争を概観し、イタリア語版のみの出版となった『マルクス主義批評論集』（1903年）におけるソレルの社会科学方法論を検討する。ここでの彼の議論には、マルクス主義の「正統派」的な歴史決定論や大政党的「綱領」に対する批判と、「モラル」や「制度」への関心、「実践的提言」ないし「社会詩」としてのマルクス主義、「還元」という方法論などのテーマが現れている。基本的に本書での議論は方法論的次元に限定されているものの、その内容は同時期の彼のサンディカリズムへの傾倒を示すものであるし、

また後の『暴力論』で展開される「神話」や「分断」などの議論の萌芽ともなっている。

第三章では、彼のフランス・サンディカリズム論について検討する。彼は1898年の論文「労働組合の社会主義的将来」等にてサンディカリズムへの加担を明確に表明する。これは『暴力論』のプロトタイプともされる論文である。そこでは、サンディカリズムの英雄的指導者フェルナン・ペルーティエらの影響下に、労働者の自律とその条件としての「モラル」、未来社会の萌芽としての労働組合、新たな「法」の創出を目指す闘争などのテーマが論じられている。これらはサンディカリズムの運動を思想的に代弁する内容ということもできるが、他方で、ソレルの元来のテーマである産業主義・生産力主義は、フランス・サンディカリズムと彼の思想との乖離をも示している。

おおむね1903年頃までのソレルは政治や民主主義、あるいは政党に対して必ずしも否定的ではなかった。ただし、ドレフュス事件へのコミットとその後の「挫折」を通じて、彼は政治と民主主義に対してほぼ完全に否定的態度を取る。またこの「挫折」は、彼の機械工学的世界観に由来孕まれていたと思われる反人間主義的モチーフを前景化させる。その結果、同じくサンディカリズムを扱いながらも、1908年の『暴力論』ではその論調は大いに変化している。

第四章ではソレルの主著とされる『暴力論』について検討する。そこで述べられる「神話」や「暴力」のモチーフは一見して非合理主義的にも見えるが、ここで重要な点は、それらが資本主義を破壊するのではなく、むしろそれを高度に促進すると論じられることである。『暴力論』第七章で論じられるように、「暴力」を行使する戦士の「モラル」と高度な生産力を実現する労働者の「モラル」は同一である。

また本書においては、「パスカルの」と称される、反人間主義の前景化が重要な意味をもつ。一般に『暴力論』は、「強制力」に対抗し、「モラル」や意志にもとづく「暴力」を謳った書物とされている。表面的にはそのように見える彼の議論は、実際にはそのような意志に対する被縛性や、「強制力」による拘束性の契機を高度に強調し、むしろ機械工学的な決定論にかぎりなく近づいている。そのような決定論的世界観を彼は『暴力論』序章でパスカルやハルトマンを援用しつつ、「習俗の形而上学」としての「ペシミズム」と称している。

第二部ではソレルの影響について、代表的な論者を三人挙げて検討する。ここでソレルの影響は、彼が発展させた個々の具体的モチーフ（「神話」、「暴力」、労働者の自律、「モラル」、資本主義、など）に加え、彼の反人間主義的世界観それ自体という、二つの次元において問題となる。

第一章では、ドイツの社会主義者にして、『政党の社会学』（1911年）によって20世紀の政治科学の嚆矢的存在ともなったロベルト・ミヘルスを扱う。ここでは、彼の「民主主義」概念が、その内容の不明確さと、実践性・倫理性を喚起するその性質のゆえにソレルの「神話」にきわめて近い性質をもっていること、また彼の主意主義的な態度と「寡頭制の鉄則」という決定論的結論との結合が、ソレル的「ペシミズム」に相同のものであるこ

とを論じる。

第二章で、イタリアのマルクス主義者アントニオ・グラムシを扱う。彼の青年期の活動である工場評議会運動がサンディカリスム的な「自主管理」の志向に近いことはしばしば論じられてきた。実際に、労働者の自律やその条件としての「モラル」への着目など、両者の共通点は数多く確認できるが、ソレルの影響はそれにはとどまらない。後年の『獄中ノート』における「ヘゲモニー」概念は、グラムシ自身が明示するとおり、「モラル」や文化への関心という点において、ソレルの「神話」から深い影響を受けている。ただしその一方で、「神話」は脱組織的・「個人主義的」行動を志向するが、「ヘゲモニー」は組織化・規律化の徹底を志向する点で両者の思想は対照的である。

第三章ではジョルジュ・ヴァロワを検討する。彼はアクシオン・フランセーズに属する王党派であったが、やがて袂を分かち「フェソー」を1925年に設立する。彼はフランス・ファシズム初期の代表的存在とされる。ただし、資本主義の合理的組織化と競争の徹底への志向や、権威への情動的同一化や暴力性の契機の希薄さなどの点で、ファシズム周辺の他の思想家とはかなり異なる性質を持つ。「頹廢」への強迫観念、悲観的人間観、それに対して、資本主義のもつダイナミズム・技術と産業の「進歩」の希求などに、ソレルからの深い影響を見て取ることができる。